

高津区おはなしアーカイブ

●河原 金蔵 (かわはら きんぞう) さん

昭和17年生まれ 76歳
川崎市高津区宇奈根在住



◆私は3代目の金蔵

私は9人兄弟の6番目。ここで生まれました。父は長男ではなかったため本家から分かれてここに分家を作りました。

私の金蔵という名前は、おじいさんの名前なんです。おじいさんは、江戸時代の生まれでしたが、私が生まれた時はまだ健在だったんです。長生きのおじいさんだったので、「あやかるように」と父がつけたと聞いています。私の上はみんな女だったので、父は男の子が生まれ、やっと後継ぎになる長男が生まれて相当嬉しかったのでしょね。お墓に行って墓石を見ると、私は3代目の金蔵みたいです。

◆多摩川は暴れ川

このあたりは、昔は「天領」と呼ばれる幕府直轄の場所だったんです。川向こう(今の世田谷区)にも宇奈根があります。

古文書を見ると、私たちが今住んでいる宇奈根の南側を多摩川が流れていた可能性があるので。久地駅から、弁天さま、下綱(さげつな)の松という有名な松があり、ここに川が流れていたという説があります。つまり昔は、ここ宇奈根は、東京と一体の村だったんです。

多摩川は何度も氾濫しました。一番大きいのは天平年間(729年から749年)に多摩川は大きく暴れて、今のような流れになったようです。今の堤防は昭和の初めにできています。そういう地形なので、昔から宇奈根に住んでいた人たちは洪水との戦いでした。どこの家も、家が流されないように木を植えていました。ここは、多摩川の流域で土が肥えているので、けやきや檜の木など大木が多かったのです。

明治45年の大水の時はこのあたり一帯は水没し、軒下に船をつないでおいたそうです。当時は養蚕が盛んで、どこの家も洪水を考えて天井裏に蚕棚を作っていました。聞いた話ですが、堰の大地主の家では、へつつい(かまど)は土台が木でできていて、その上に泥でかまどをこしらえていたそうなんです。というのは、大水が出ると浮くように大きな木の上にかまどをこしらえたそうなんです。それが大水で堰から宇奈

根まで流れついたらとも聞いています。すごいことですよ。

ですから昔はこのあたりでは、農機具が流されても誰の家のものかわかるように天秤棒や肥溜めにまですべてに焼き印を押していました。焼き印は、苗字の「河原」でなく、「やまう」などの屋号を押したそうです。

父は明治32年生まれで私が小さい時にこういう大水の話をよく話してくれました。

◆多摩川の鮎

なぜ、ここが「天領」だったかは、「多摩川の鮎」がとてもおいしくて、それを囲いこむためだったという説があるそうです。江戸城周辺の荒川などでも鮎は獲れたけれど、おいしくない、多摩川の鮎は格別だったと。

父が育った頃は、ここは東京府北多摩郡砧村字宇奈根山野（さんや）と呼ばれていて、多摩川はほぼ今の形となっていたようです。父は川を渡って砧小学校に通っていたそうです。当時、川は幾筋かに分かれていたので、狭い筋をまたいで川向うに渡る、毎日大変な通学なのに父は精勤賞をもらっているんですよ。

夏には、茅萱（ちがや）を束ねて鮎を岸に追い込んでつかまえ、笹に鮎をさして束ねて学校に持って行く。すると小使さんは、父が遅刻しても大目にみてくれたそうです。

◆土木事業と農家の兼業

うちは農家です。宇奈根には14軒の農家がありましたが、多摩川が氾濫するたびに治水工事が必要でした。その名残で今でも土木事業を兼業する家が2軒あります。

本家の伯父さんたちは、早い時期から土木事業をやり、父は農業の傍らそれを手伝っていました。

「蛇籠（じゃかんご）」ってわかりますか？川の治水工事に欠かせないものなんです。竹で編んだ直径50センチくらいの筒で、長いものは10メートルくらいあったようで、洪水対策のために川の斜面にこれを並べたそうです。これを現場でこつこつ竹を編んで作り、編んでいる間に若い衆が大きな石を拾ってきて中に入れて作りあげていったそうです。

明治に入ってから針金になり、父はこれの数少ない技術者でした。昭和30年頃まではまだいくつも土手に並んでいた記憶がありますが、さすがに今はもう多摩川では見られなくなりましたね。今はコンクリートでテトラポットなどを作っておいてますからね。

多摩川は砂利の宝庫でもあり、砂利船は、幅3メートル、長さ10メートルくらいの帆かけ船でした。写真で見たんですが、帆は「メリケン粉」の袋を利用していたんですね。明治時代に外国から粉を輸入した時の袋が帆になっていたんだと思います。帆かけ船で川を下って川崎駅近くにある明治

製糖辺りで砂利をあげて、一部は貨車に積んで東京に運んでいたそうです。多摩川で砂利を掘ることは前の東京オリンピック頃まで続いたんです。ですからこのあたりは、宝の山だったんです(笑)。

宇奈根は、人は三角区にまとまって住んでいて、久地小学校の交差点から多摩川に向かう東側は畑が広がっていてそこで砂利を掘っていたんです。多摩川の泥も品質が良くて、屋根瓦に向いていたので、北見方方面には瓦屋さんがありました。



◆宇奈根は桑から桃へ

昭和の初めまでは、このあたり一帯は桑畑が広がり製糸場(せいしば)もあったようです。それが1929年(昭和4年)の世界恐慌で生糸がダメになり、大きな借金を抱えた人もいたと聞きました。桑畑が桃や梨畑に代わっていきましたが、宇奈根は9割が桃で私の子どもの頃まで桃の木は残っていましたね。戦前は、共同出荷でトラックが来て神田の市場まで運んだようです。

「多摩川水蜜(すいみつ)」というキャッチフレーズで、すごい人気だったそうです。

うちは桃を8反、2,400坪やっていました。戦争で、果物は贅沢品だからと、木を切って、サツマイモ、ジャガイモなどを作り供出したんです。母は、桃の木を切る時は、涙を流したと話していました。

◆2,400人の高津小学校

私は高津小学校に通いました。

入学時の私の学年は12クラスあって、1組が4月生まれ、2組は5月生まれ…となっていました。2,400人いたんですよ。校舎は全然足りなくて二部制でした。遅番の時は、つつい遊んじゃってね。大目玉くらったこともありましたね。

6年の時には運動部の部長で、夏のラジオ体操(8月1日から15日)は朝礼台の上でみんなの方を向き体操しました。すごくいい眺めでした。夏休み中でもラジオ体操にはほぼ全員参加していましたね。うちは農家なので朝が早いのは慣れていましたから、毎朝6時前に学校に行ってラジオを接続して準備をしました。この時は自転車で行くことが許されていたんです。宇奈根からはみんな自転車で行きました。普段は自転車で学校に行くのは禁止だけど、この時は別でした。運動会でも私は朝礼台に上がって、みんなの方を向いてラジオ体操しました。学級委員長もやっていましたよ。

◆多摩川で泳ぐ

高津小学校では4・5・6年生を対象に多摩川で「水泳教室」が開催されていたのですが、わんぱく少年だったので、小学校入学前から多摩川で泳いでいました。大抵の子がふんどしでしたね。水中メガネもつけずに潜り、白い石を見つける遊びをしていました。鮎がたくさん泳いでいて、本当に綺麗な多摩川でしたね。

3、4年生の頃に、親戚のお兄さんが「ウナギ洞」を仕掛ける手伝いをしました。

藪のミミズをバケツ半分くらい捕まえ、それを「ウナギ洞」に入れて仕掛けるんです。お兄さんが途中から仕事の都合で、ウナギ漁ができなくなったので、9本の「ウナギ洞」をもらい、小学5年から中学1年までウナギ漁に夢中でした。6月後半から8月のお盆までウナギをとって溝口の恒川さんに持っていくと、1貫目2,700円で買ってくれたので子どもにとってはいい稼ぎ、大金を手にしていました。

◆まちのあちこちで泳ぐ

私が小学生の頃は二ヶ領用水の水はきれいでした。今の「すくらむ21」の向かいにあった同級生の藤江君の家は染物工場で、学校帰りにそこにかばんを置いて、手ぬぐいの端切れをもらってふんどしにして二ヶ領用水に飛び込んで泳ぎました。泳いでいくと大山街道のところにあがり口があって、その次は大井町線の鉄橋の根元に階段がつ

いた上り口がありました。そこで上がれないと、坂戸の方まで行ってしまうんです。コンクリートで滑るんですよ。上がれない子がいたら手をひっぱってあげてました。

溝口の宗隆寺には根方堀の堰があって、ダムみたいな深いプールのようになっていてそこでは中学生になってもよく泳ぎました。

円筒分水でも泳いでよく怒られましたね。確かにあそこは危ないんです。下で水が回転しているんですから。危なくなったら、壁をポーンと蹴って上がってくる、そういうことを教えあっていました。

砂利を掘った穴が池のようになって、ここでも泳ぎました。昔は、泳ぐ場所がまちのあちこちにありました。二ヶ領用水にもこんなめがね橋があちこちにかかっていた。



◆季節ならではの遊び

久地新田にクヌギ林があって、6、7月にはカブトムシをたくさん採って学校に持って行き、みんなに喜んでもらいました。

現在の久地小学校あたりから流れる山野川、多摩川にはホタルもいました。麦わらでホタルの籠を作ってホタル狩りもできました。

久本にも友達がいて、久本山で野兎を追いかけて、秋には津田山から長尾にかけてアケビ採り、「この沢をあがるとアケビが採れるよ」と教えてあげる、ガキ大将の面目を果たす季節でした。多摩川の土手にはマツムシ、スズムシがいて、虫かごに入れて市場に出荷もしてました。

冬には、下作延の根もじりの友達に誘われ、末長の池（現在の梶ヶ谷駅近く）に行きました。池には氷が張っていて、地元の子どもは下駄に刃をつけスイスイ滑ってました…川育ちの私には別世界でしたね。

登校途中、津田山沿いの府中街道の沢には、50～70センチの氷柱ができていて、新聞紙に包んで学校に持っていきました。

カブトムシ、氷柱などを学校に持っていき友達を喜ばせ、常にみんなの注目をあびる、これがわんぱく少年の鉄則でした(笑)。

春、3月は梅の季節。久地梅林では芸者さんの三味線に合わせて酒宴が広げられている光景は、学校帰りによく見かけていましたね。

◆台風が来ると土手に集合

台風がきて、大水が出ると、宇奈根の人たちは「堤防は大丈夫か」と土手に集まってきました。

台風が通り過ぎると、流木拾いです。中島の浅瀬に流れついた流木を確保するんです。これは風呂やかまどの燃料としてすごく重要で、私もよく取りにいきました。

◆中学生から家を手伝う

小学生の頃は野球のキャプテンをやっていたんですよ。生徒がたくさんいたので4チームもできちゃうんです。校内でよく対抗試合をやりました。百姓の息子だから力があるんですね。打球が飛んで学校のガラスを何枚か割ってしまいましたけど(笑)。

中学進学時に、野球部から勧誘されたんですが、中学生になると家の仕事を手伝わなくてはいけないので断りました。姉にも強く言われてね。だから野球は小学校で終わりました。

◆野菜栽培農家を継ぐ

高津中学校に進み、卒業後は農家の仕事をしながら、平間にある県立工業高校の定時制に進みました。朝4時頃に起きて、出荷の準備をし、リヤカーをひいて溝口や川向こうの市場に出荷に行きました。3月頃は、玉川高島屋へ行く坂を登った頃に、朝日が出てきましたね。出荷後は、畑仕事をし、午後4時にあがって、食事をして学校に行く、学校には仲間がいて楽しかったです。授業が終わってから柔道したりして、家に帰るのは11時頃でした。母も姉も翌

朝出荷する野菜を洗ったり、準備で起きていました。

この生活ではどうにも体が続かなくなり、泣く泣く3年になる時に高校はやめました。父を18歳で亡くしたので、一層家の大黒柱として野菜づくりを頑張りました。

ここは多摩川のおかげで土は肥えているんです。宇奈根では、霜柱はほとんど立ちません。1年中安定して野菜が採れて、1年のうち300日くらい出荷したこともあります。同じ高津区でも久末などは霜柱が立つんですね。

この写真は昭和32年、高校をやめる年で、ここに写っているのが私です。約3,400本のトマトの促成栽培で、設備投資としては当時として画期的でした。

外側の網は友人の大森の海苔業者が、東京オリンピックに向け高速道路ができることで廃業になったので、そこからもらいました。



桃は戦後復活し、昭和26年頃まで600坪くらい作っていました。私は小学2年生くらいから、桃の出荷用の箱を釘で打ち付ける手伝いをして、一つひとつ「さくら

紙」という高級ちり紙に包んで出荷していました。

戦後は、東京から宇奈根に買い出しに来るお客様もできてきました。中には後に息子さんがNHKのアナウンサーになった方もいて、編み上げの皮靴を履いていて、子ども心にあこがれていましたね。お子さんの小さくなって履けなくなった革靴をおさがりに持ってきてくれたり、隣のお兄ちゃんに野球のグローブを持ってきてくれました。野菜との物々交換が基本でした。着物を持ってくる人もいたようです。

◆お神輿が多摩川を渡る

宇奈根は、昭和2年に祠をこしらえて分岐して神社ができたそうです。それまではお宮はなかったんです。祠をこしらえても、お祭りは、10月10日、川向こうの本村（ほんむら）と一緒にだったんですね。

砂利船にお神輿や太鼓をのせて、多摩川を渡ってくるんですよ。これはもう絵巻物ですよ。今でもその光景は目に焼きついています。神輿を担いで農家14軒を1軒ごと回ってくれて、昭和24年まではこの光景が見えたんです。どの家でも祭りにあわせてどぶろくを作って担ぎ手にふるまっていましたね。

昭和25年に、うちの方で大太鼓ができたのをきっかけに、川向こうからは神輿・太鼓が来なくなりました。お宮ができた記

念に、1回きりでしたが、相模原から農村
歌舞伎の一座が来てくれました。

◆高津消防団員を48年

我が家は、野菜の他に、養鶏もやっていた
ました。野菜農家から専業養鶏になり、い
つも家にいることが多く、そんなこともあ
って昭和44年4月1日に町会推薦で溝口
所属の消防団に入りました。以来48年、
災害現場への出動は、市内でも多く出た方
だと思えます。ざっと数百件は出ています
から。何かあると、我が家に消防署から連
絡が入ります。家内が連絡網で連絡係をし
てくれ、私は支度をして、出動です。最後
の7年間は高津消防団の団長をやりまし
たし、川崎市、また神奈川県消防団の役職
も務め昨年3月で引退しました。今年春の
叙勲をいただくことができ、皇居に行つて
きました。

多摩川を挟んで川向うの宇奈根と私が生
まれ住み続けている宇奈根、両親や大先輩
から聞いた昔の話は胸にあり、目に焼き付
いている多摩川を渡る大太鼓や神輿を乗せ
た船、今もとても素晴らしいところだと思
っています。

(平成30年10月9日取材)